

取材と訪問のラッシュ～満10年の実績の重さか?～

これまでも様々な訪問や取材は受けてきたが、この1週間というものは、連日全く途切れがない。10月16,17日の国立日高青少年自然の家主催の、「第1回北海道青少年相談ミーティング」から帰るや否やの連日のラッシュだったが、まだ止まらない。日高での会議は、昨年と同時期に、「全国青少年相談ミーティング」が初めて東京以外の地方、北海道で開催されたが、おそらく北海道での開催は今回が最初で最後との事だったので、ぜひ北海道の規模でも良いので、例年開催してほしいとの多くの参加者の声を受けて、第1回が開催された。主催者の話では、最低でも今後10年ぐらいは続けたいとの事なので、これからが楽しみだ。

21日から25日まで、埼玉大学環境教育学部安藤聡彦ゼミナール4年生のI君が滞在した。彼はすでにゼミのメンバーとして過去2年間で実に5回もビバを訪問している。卒論のテーマも『ビバハウス』に決定し、最近決定した、大学院への進学でも、修士論文でビバを取り上げたいとの事だ。

22日には、東京の取材・編集専門会社「オンソノ」の若い社員の取材を受けた。これは内閣府の平成22年度『子ども・若者支援地域協議会体制整備モデル事業』の実施に基づくもので、全国の20団体を青少年支援事業団体の先駆的モデル事業として紹介し、全国のこの事業を推進していく為のものである事が分かった。1団体約8千字の「ルポルタージュ(仮称)」を、8千部づくり、全国の関係者に配布する計画という。確かに、昨年7月1日に『子ども・若者育成支援推進法』が成立し、今年4月1日から施行されたが、その目玉はずの、全国の自治体に『若者支援協議会』を設置する仕事も遅々として進んでいない。余市町では、ビバ側からの強力な働きかけで、当時の民生部長さんの英断で、3月31日付で準備会を発足して頂き、この11月12日には第2回目の学習会が予定され、ビバから数件の事例が報告されることになっている。残念ながら、小樽市を含め、他の後志の町村での協議会結成の声は聞こえない。ビバハウスを含めた20団体の実践が、全国の若者支援の働きに役立ってくれたら、これ以上の喜びはない。

25日には、複数の訪問者の対応をしているところに、子どもさんの緊急事態で相談に来られた札幌の親ごさんもいててんてこ舞いだっただ。北海道の引きこもりやニートの若者たちにメールや、お手紙で支援を過去10年もして下さっているNPO法人レター・ポストフレンド・相談ネットワーク(田中敦理理事長)の副代表の取材を受けていたのだ。この団体では、『北海道ひきこもりハンドブック』を、これまでのひきこもり当事者の目線から、取材、編集して、引きこもり当事者にとって、一番役に立つガイドブックを作りたいという。全道約40箇所のひとつとして、ビバを選んで頂いたご期待に応えたい。

同日には、姫路市の引きこもりの親の会「みやすの鐘」の理事長さんのご訪問を受けた。2年前に、私たちがお招きを受けて、交流させていただいた懐かしい再会だった。